

〈解答〉

- ① 1 こ 2 がんちく 3 そくばく 4 供 5 設営 6 補給
- ② 1 〔例〕 見事
- 2 〔例〕 玄知が梅の木をかう(こと)。(9字)
- 3 そこなわざるよう
- 4 イ
- 5 〔例〕 買った梅の木を、いつまでもそのままの場所に置くよう、玄知が言ったから。(35字)

配点 ①、② 3は各1点、他は各2点 15点満点

〈解説〉

- ① 「乞う」は「他人に物を与えてくれるよう求める」「何かをしてもらえるよう願う」という意味の動詞。「いとまを乞う」は「休暇を願い出る。ひまをもらう」、「別れの挨拶をする。別れを告げる」という二つの意味がある慣用表現。
- 2 「含蓄」は「中にふくみをもっていること」で、多くの場合「表現が、ある意味を含みもつこと」「深い意味がひそんでいること」「表現に味があること」という意味で用いられる。つまり「含蓄のある話」とは「深い意味をもつ話」と解釈することができる。「含」の訓読みは「ふく(む)」、「蓄」の訓読みは「たくわ(える)」である。
- 3 「束縛」は「しばり捕えること」で、多くの場合「行動や働きに制限を加えて自由を奪うこと」という意味で用いられる。「束縛」の対義語は「自由」「解放」で、「束」の訓読みは「たば」、「縛」の訓読みは「しば(る)」である。
- 4 「供」は「そな(える)」のほかに「とも」という訓読みもある。音読みは「キョウ」で、「供給」「提供」などの熟語として用いられる。「そなえる」には、「供える」以外に「備える」という同訓異字があるが、神仏や貴人に物をととのえて差しあげる場合は「供える」を用い、前もって準備しておく、十分に整えそらえるという場合は「備える」を用いるという使い分けがある。
- 5 「設営」は「ある事をするために必要な建物・施設・会場などを、前もって準備すること」という意味。「設」の訓読みは「もう(ける)」、「営」の訓読みは「いと(む)」である。
- 6 「補給」は「足りなくなった分をおぎなうこと」という意味。「補」の訓読みは「おぎ(なう)」である。「補」には、「捕」「哺」「舗」という、形が似ていて「ホ」と音読みする漢字があるので注意する。

②

「春波楼筆記」は、江戸後期の蘭学者、洋画家として知られる 司馬江漢しばこうかんが著した随

筆集。著者の目に映った江戸時代末期の社会風俗について感じたことや考えたこと、また、人間観、死生観、学問観などが記されており、当時の世相をうかがううえで貴重な資料となっている。

1 古文における「をかし」は「普通とは異なる格別な趣のあるさま」を表すことが多く、「風情がある」「興味深い」「優美だ」「見事だ」などと現代語訳する。本文の場合は、梅の花が咲いている様子を「をかし」と表現しており、「見事だ」「優美だ」「立派だ」という意味で使われていると判断する。

2 傍線部②より前の内容をしっかりと把握する。玄知という人物が、見事に咲いた梅の花を気に入る、その梅の木の持ち主にその木を売ってほしいと頼んだ。その申し出に対し、梅の木の持ち主は、いったんは断ったが、高値を付けられたので、やむをえずその梅の木を売ることにしたということである。つまり、望んだ内容とは、「玄知が梅の木を買うこと」である。

3 古文に出てくる語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、それぞれ「わ・い・う・え・お」に直す。よって、「は」を「わ」に直せばよい。また、「ア段の音十う」は「子音十おう」と読む（例えば「さうらふ」は「そうろう」と読む）という法則に従い、「やう」の部分を「よう」に改める。

4 最後にある玄知の会話文に「ただ、わが物にして、花を見るこそ望みなれ（＝ただ自分の所有物として梅の花を見ることだけが私の望みである）」とあるのに注目する。玄知が梅の木を買い取ったのは、見事に咲く梅の花を自分の所有物として見たかったからで、その花が見られるのであれば、梅の木をわざわざ自分の家に移植する必要はないと玄知は考えたのである。

5 古文における「あやし」は「普通ではない事物、正体のはっきりしない事物に対して不可解に思うさま」を表し、「不思議だ・神秘的だ」「おかしい・変だ」「珍しい」「不都合だ」「不安だ・気がかりだ」「みつともない・見苦しい」などと現代語訳する。本文の場合は、高値で買い取った梅の木を、今ある梅園にそのままずっと置いておいてほしいと玄知に言われたため、梅の木の（元の）持ち主が「買い取ったものを自分の家に運ぶことを断るなんて、不思議なことだ」と思っている様子を「あやし」と表現しているということである。

〔大意〕

玄知は出雲の国（現在の島根県東部）の人物で、風流を好んでいた。ある日、山里を歩いていると梅園があった。梅の花が今を盛りとばかりに見事に咲いていたので、梅の木の主を訪ねて、その梅の木を買い取たいと言った。（梅の木の主は）強く拒んだが、（玄知が）高値を提示して買い取ることを望んだので、仕方なく（梅の木を売り渡すことを）約束した。玄知は、あくる日に酒と魚を持ってその梅の木の下にやって来て、（花見を）大いに楽しんだ。梅の木の主はこれ（＝梅の花を見て楽しむ玄知の様子）を見て、「（梅の木の）根を損なわないように掘りとって、明日にでも（あなたの家に）持っていきましよう」と言った。玄知が言うには、「いいえ、（私の家に梅の木を）持ってこなくてもいい。（この梅の木は）いつまでもここに置いておいてほしい」と（言った）。梅の木の主は、とても不思議に思っ、て、「それならば梅の果実が熟したらどうすればよいでしょ

うか」と（玄知に）尋ねた。（すると玄知は、）「梅の果実は（私にとって）用なし（のもの）である。ただ自分の所有物として梅の花を見ることだけが私の望みである」と言
ったということである。